

「1968」発表の小熊英二氏に聞く

# 反乱の背景に「現代的不幸」

60年代末、日本列島を揺るがした若者の反乱とは何だったのか。小熊英二・慶応大学教授（歴史社会学）に写真、鈴木好之撮影が書き下ろした『1968』（新曜社）が、反響を呼んでいる。反乱の背景には当時の日本が直面していたアイデンティティー危機、心

# 文化



の問題ともいえるべき「現代的不幸」の洗礼があったとする主張を、上下巻2千ページ超で展開した意図を聞いた。機動隊との対決の武勇伝、

バリケードの中の青春という祝祭的側面が強調される一方、内ゲバや連合赤軍事件へと至る負のイメージが人々の脳裏に刻まれてきた「あの時代」。62年生まれ的小熊さんが目指したのは、断片でなく全体像を、社会科学的手法によって解き明かすことだった。

め、手に入る限りの資料を読み込んだ日々を振り返る。慶大、中大などの学費値上げ反対闘争や学内民主化要求から始まった日大闘争を経て、学生たちの反乱は「大学解体」「自己否定」のスローガンに象徴される東大闘争の理念先行的なスタイルを模倣し、全国に波及していく。背景として小熊さんが着目するのが、高度成長という社会の地殻変動だ。貧困や差別といったわかりやすい「近代的不幸」とは異なる次元で、不登校など、人々は新たに表れた「現代的不幸」を感じ取っていた。おまえはなんなのだ、どんなふうに住きればいいのかという、いわば自分探し。まったくなかった指摘ではないが、小熊さんは若者たちの反乱とは、こうした実存的問いが大きな社会変動の中で必然的に浮上した現象だった、とみる。

それは一部の論者が唱えるような「世界革命」とは呼べないし、「文化革命」という見方も神話化されすぎだと、

指摘する。若者たちが否定した戦後民主主義への知識は浅薄だとして、その「稚拙さ」を批判もする。著書は運動の「稚拙さ」の検証をしているとの読み方もできるが、「悪い意味で言っているわけではない」と小熊さん。「時代の大きな構造的変動があつて、若者たちの『言葉がみつからない』内面をくみとる力を、既成左翼がもたなかった。結果的には、理念先行の東大闘争が学生の心を一番ひきつけたんだらうし、そういう形にならざるをえなかったと思う」。ただ、それは具体的な目標を掲げた政治闘争から離れたがゆえに持続せず、展望をもたず、また二者択一の倫理主義を強めて一般の支持を失い、崩壊する。行き着いた先が連合赤軍事件だ。

結論では、68年の運動の挑戦と敗北から学び、建設的に生かせと説く。あえて希望を意識した記述になったのは「『あの時代』のうみを濾過してあげることが自分の役割と思つたから」。さらには現

2009. 8. 25

朝日新聞

代の若者たちが向き合う苦悩と「あの時代」が、一つながりであることを近年、痛感するからという。  
「若い人たちが今回の本を『面白い』と言ってくれたの

は、ありがたいなと思いましたね。イケイケドンドンの高度成長期だった彼らの反乱の時代とは違うけれども、くみとるべきものはきつとある」  
(藤生京子)